

20世紀の版本と編纂における Q1 *Hamlet*

野口忠昭

I

第一四つ折り本 *Hamlet* (以下 Q1 *Hamlet* と略す) はシェイクスピア編纂史上、1823年までその存在が確認されることはなかった。この年に最後のページを含む一枚が欠けた一冊目の Q1 *Hamlet* が Sir Henry Bunbury の Barton にあった家の押入で発見され (後、アメリカ合衆国の The Huntington Library に所蔵される)、1856年にはタイトル・ページのない二冊目の Q1 *Hamlet* が公に姿を現わす (最終的にそれは大英博物館に所蔵される) ことになる。¹⁾

Q1 *Hamlet* は19世紀中に、復刻版、ファクシミリ版などの形で世に出され、中には、第二四つ折り本 *Hamlet* (1604/5 ; 以下 Q2 *Hamlet* と略す) とパラレル形式をとるものも現われることになる。²⁾

20世紀には、同じくファクシミリ版、現代用に綴り字を変えた版、Q1, Q2, そして第一二つ折り本 (以下、二つ折り本は F と省略) の *Hamlet* を横に並べ、その相互の違いをなるだけ明瞭にしようとした版が出版される。更に、ハイテクを駆使した CD-Rom 版が出版されている。本世紀になってから、テキストとして出版された Q1 *Hamlet* として、Frank G. Hubbard, ed., *The First Quarto Edition of Shakespeare's Hamlet* (1920) / *Shakespeare's Hamlet, the First Quarto, 1603*, reproduced in facsimile from the copy in the Henry E. Huntington Library (1960 ; originally publ. by Harvard U. P. in 1931, using the Huntington Library Copy) / Photographic facsimile Edition with a critical apparatus by W. W. Greg (Oxford: Clarendon Press, 1940) / Photographic facsimile Edition in *Hamlet: First Quarto, 1603* (Menston: Scolar Press, 1969) / Geoffrey Bullough, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, vol. 7 (London: Routledge and Kegan Paul, 1973) / Michael Allen and Kenneth Muir, eds., *Shakespeare's Plays in Quarto: Hamlet* (Berkeley and Los Angeles: California U. P., 1981) / Paul Bertram and Bernice W. Kliman, eds., *The Three-Text Hamlet* (1991) / Graham Holderness and Bryan Loughrey, eds., *The Tragicall Historie of Hamlet Prince of Denmarke* (1992) / *The Editions and Adaptations of Shakespeare: CD-Rom Edition* (Cambridge: Chadwick-Healey, 1995) などが挙げられる。

テキストの出版と同時に、Q1 *Hamlet* の上演もこれまでに、何回か行われている。1985年の、The Orange Tree Theatre, Richmond ('a small London theatre with a reputation for classic revivals'³⁾) による上演に関し、Brian Loughrey はその関係者らに対してインタビューを行い、その中で、

Loughrey は Q1 が記憶によって再構成されたテキストという理由で、意味をはっきりさせる必要からテキストの書き替えなどをして、申し訳ない気持ちになったことはありましたか、という主旨のことを尋ねている。それに対し、Sam Walters はそんな気持ちになったことはない。テキストを「訂正」といったようなことはなく、私達は Q1 *Hamlet* を演じたのであって、申しわけないといった気持ちになったことなどはない、という主旨の応えをしている。⁴⁾

この反応は、Q1 が立派に上演可能で、しかも、演じる側に大きなやりがいを与える類のテキストであるということを物語っていることが分かる。つまり、これまで中心となっていた Q2 / F1 *Hamlet* あるいは、それらのテキストを典拠とした *Hamlet* の上演だけが観るに耐える上演ではなく、Q1 *Hamlet* も同じく鑑賞に値し、*Hamlet* の上演世界に立派に参入できる資格を獲得しつつあるということである。Q1 *Hamlet* のテキストとしての自律性を認めてよいことをこの上演関係者達は語っているのである。テキストの自律性が問題になる背景には、主として、テキストが、韻律の不揃い、文学性に欠ける点、元の舞台に用いられた台本にあった台詞の位置が Q1 ではでたらめだったりする点など、熟達した座付き作家の作ったものとは思われないといった事情があった。更に、1594—1609年の15年間に上演された18の沙翁の演劇が、四つ折り本、八つ折り本の形で印刷されていたのだが、18世紀の頃から沙翁のテキスト校訂において、殊に5つの Q 版、Q1 *Romeo and Juliet* (1597)、Q1 *Henry 5* (1600)、Q1 *The Merry Wives of Windsor* (1602)、Q1 *Hamlet* (1603)、Q1 *Pricles* (1609) は総て短いものばかりで、それぞれの Q2 と F1 版中に収まったテキストの長さと比較すると、特にその短さが目立ち、Q2 や F1 のテキストの言い回しや台詞の配置などに比して、これらの Q1 テキストは総じて質が落ちるし、筋の展開は大きく変わっているとされてきたのであった。⁵⁾

そして、何よりも問題だったのは、Q1 *Hamlet* が沙翁の書いたものではなく、その成立に関しては、Q1 *Hamlet* が発見された当時から今に至るまでいくつかの説が提示されてきたことである。記憶に基づいて、ある *Hamlet* の上演を観ていた観客が役者の口から出る台詞を速記で書き留めて、それを基にした原稿から印刷されたものが Q1 *Hamlet* であると考えた J. P. Collier を祖とし、後に、それを修正したり、補足したりすることになる記憶再構成 (memorial reconstruction) 説を筆頭に、台本を不完全に写した原稿から、あるいは、劇場所の原本や作者の草稿を盗んで印刷したという説 (Singer)、習作期作品説 (Caldecotte)、書き替え説などが主な説として挙がる。⁶⁾

Q1 *Hamlet* の評価はこのような Q1 テキストの成立説がほめかすところと関わり、中でも、記憶再構成 (memorial reconstruction) 説をその考え方の中心に据えた「新書誌学派 (New Bibliographers)」の評価が20世紀初頭より大きな影響力をもち、Q1 *Hamlet* は 'bad' という形容詞を冠されてきた。しかし、最近では Steven Urkowitz がその中心的存在となって、Q1 *Hamlet* の再評価がなされてきているという事情があり、新書誌学が優勢を誇っていた20世紀前半とは異なり、20世紀後期では、Q1 *Hamlet* の上演のところでも触れたように、その扱い方に明らかかな変化が見られるのである。⁷⁾

小論は、このような再評価のなされてきている Q1 *Hamlet* が20世紀の版本の編纂に際してどの程度の重要性を有し、どの程度の利用がなされているのかということになるだけ明確にするこ

とである。しかし、Q1 *Hamlet* の意義を確認するために、20世紀の版を通覧することは、紙数の上から、また、筆者の非力から叶わないので、

- 1) John Dover Wilson, ed., *The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark* (1934).
- 2) Harold Jenkins, ed., *The Arden Shakespeare: Hamlet* (1982).
- 3) *Hamlet*, in *The Oxford Shakespeare: The Complete Works* edited by S. Wells and G. Taylor with J. Jowett and W. Montgomery (1988).
- 4) *Hamlet, Prince of Denmark*, in *The Riverside Shakespeare*, 2nd edn, eds. G. Blakemore Evans and J. J. Tobin (1997).

以上の4版を、20世紀の代表的な *Hamlet* テキストとみなし、これらの版に Q1 *Hamlet* がどのよう⁸⁾に扱われているのかを探ろうとした。

II

1) *The New Shakespeare: Hamlet* (1934) の Q1 校合状況

その第一は、今世紀の初頭に刊行された、「新書誌学派」の一員といえる John Dover Wilson 編纂の *The New Shakespeare: Hamlet* に関してである。

Wilson は自版を編纂する際、その Textual Companion といえるものを著した。*The Manuscript of Shakespeare's Hamlet and the Problems of Its Transmission*, 2 vols. (1934) がそれである（以下、MSH と略す）。Wilson はこの中で Q1 *Hamlet* について次のように述べている。

The campaign began sixteen years ago with simultaneous attacks upon the textual and dramatic problems; and so little did I realise what I was doing that in both cases I selected the most difficult point of all for my attempt: the Play-scene, on the dramatic side, and the First Quarto, on the textual. ...if any final solution of the bad quarto could be hoped for we must first make up our minds quite definitely about the character of the two good texts, seeing that in them and in them alone is to be found the bibliographical basis necessary for such a solution...

I had set out to discover what sort of wild ass had perpetrated the ridiculous text of 1603... (pp. xii-xiii).

下線部が示すように、Wilson は Q1 *Hamlet* を極めて劣悪なテキストと見なし、テキストとしての信頼性に欠けると判断している。

Wilson は自分の出す *Hamlet* はそれまでの版総てが典拠としていた Folio 版とは違い、Q2 *Hamlet* であることを強調する。Wilson は Q2 版のタイトルページのことばより Q2 *Hamlet* が沙翁の草稿 (foul papers) から直接印刷された版であると見当をつけ、それを MSH で例証しようとしたのであった。

この評価を反映して、Q2 *Hamlet* を典拠とする、折衷式編纂の、*The New Shakespeare: Hamlet* は、表1が示すように、Q1 *Hamlet* からの異文の校合は40箇所ていどに留まっている。本版の校合箇所全体から見ると、その40という校合数は大変小さく、信頼に値しないテキストという Wilson の Q1 評価と合致している。

その40の校合箇所のうち、3箇所はQ1の異文を採用した箇所になっていて、それらの箇所は、1) 3.2.241, 2) 3.4.102のト書き, 3) 5.1.252のト書き, の三箇所である。ト書きの採用率が高いが、それは自版の Notes において、Stage-directions に関し 'Occasional use has been made of directions from F1, while hints are even at times taken from Q1, which is valuable as evidence of what the reporter saw taking place on the Globe stage' (p. 242-3) と注記し、典拠の Q2 *Hamlet* 以外に Q1 と F1 も取り入れることを明言しているからである。これは Q1 を 'the ridiculous text' と言い切ったことからして、ある矛盾といえる。さらに、ト書きだけではなく、いくら本文の付随的事項 (accidentals / incidentals) とはいえ、本文の字句に関して Q1 の異形を採用したわけであるから、これもまた、矛盾といわなければならない。

実際の異形採用に関してはこの程度だが、表1の下線部から分かるように、この版の典拠 Q2 の読みが正当であることを Q1 の異形を参考にして補強 (表1の1.3.65の箇所参照) したり、Wilson の版までの多くの版が採用してきた F1 の異形より Q2 の読みの方に正当性のあることを Q1 の異形を持ち出し、議論することによって示しているところがある (表1の1.5.62; 5.2.342の箇所参照)。他にも、Q1 の異文が校訂上の判断の基準になっていることが分かる箇所が MSH には見られる。

こういったことから判断して、Wilson は MSH の 'Preface' でいった 'the ridiculous text' とは大きくかけ離れた、矛盾ともいえる信頼を Q1 に対し抱いていたのではないかといえ、Q1 *Hamlet* は *The New Shakespeare: Hamlet* の校訂、編纂にとっては少なからず有効であったといわなければならない。

表1

J. D. Wilson が Q1 *Hamlet* を校合した箇所

幕 / 場 / 行 (Wilson の版のもの)	<i>The New Shakespeare: Hamlet</i> と MSH にある Wilson の説明について (Notes とは J. D. Wilson, ed., <i>The New Shakespeare: Hamlet</i> (1934) の巻末注のこと。また、MSH とは Wilson, J. Dover, <i>The Manuscripts of Shakespeare's Hamlet and the Problems of Its Transmission</i> , 2 vols. (1934) のこと。SD は stage direction の略。太字は Q1 が大きく引き合いに出されているところを示す。)
(Q1 の校合が巻末注より明らかな箇所)	
Notes on Stage-directions:	<i>The New Shakespeare: Hamlet</i> , Notes, pp. 142-3: 'Directions from the original texts are indicated by inverted commas. Occasional use has been made of directions from F1, while hints are even at times taken from Q1, which is valuable as evidence of what the reporter saw taking place on the Globe stage'. ト書きを考えるために F1 を校合し、何回か用いている。一方、Q1 も示唆を与えるので、時々採用している。それは Q1 はテキストを再現した者 (reporter) がグローブ座で上演されていたところの証として貴重だからであると Wilson は説明している。

1.1.21

63

98

175

1.2.129

198

Q 2 / F 1 の 'In the dead wast and middle of the night' を 'In the dead waste and middle of the night' と校訂した箇所。Notes, p. 153 :

'Q 1 "the dead vast," which most edd. follow, quoting Temp. 1.2.327 "that vast of night." The two words are variant forms, and the sense is the same, i. e. the desolate hours about midnight when all nature sleeps. ...Marston, Malcontent, 2.3. "Tis now about the immodest waist of night," seems to be a parody of this and 3.2.391'.

他の版が Q 1 の異形に従っていると注記しているところから、下線が示すように他の版に対して Q 1 が本文校訂に影響を与えてきていることを示している。

1.3.59-80

65

Q 2 の 'Of each new hatcht vnfledgd courage, beware' を 'Of each new-hatched unfledged courage. Beware' と校訂した箇所。MSH, p. 295 には、'The well-known advice of Polonius to Laertes at 1.3.64-5 runs in the three texts :

- (Q 2) But doe not dull thy palme with entertainment
Of each new hatcht vnfledgd courage
(Q 1) But do not dull the palme with entertaime,
Of euery new vnfleg'd courage
(F 1) But doe not dull thy palme, with entertainment
Of each vnatch't, vnfledg'd Comrade.

Apart from the misprint or the mistranscript in "vnatch't", all editors have followed F 1. The agreement, however, between Q 2 and Q 1 makes it tolerably certain that "courage" appeared in the original prompt-book and that "Comrade" like so many of the easier readings of F 1 was nothing but a paraphrase or makeshift on the part of Scribe C. The apparently nonsensical "courage" can be explained, on the other hand, if we suppose that Shakespeare wrote some word rather illegibly in his manuscript, that Scribe P took it for "courage", that this reading passed muster on the stage, was reproduced by the pirate and so appeared in Q 1, and finally that the Q 2 compositor, puzzled by Shakespeare's word as Scribe P had been, turned for light to Q 1 and in his turn set up "courage".

とあり、Q 2 が Q 1 と符合している点から、'courage' という単語が台本にあった語という結論を下しているのだが、つまり、Wilson は、下線を引いた箇所が示すように、Q 2 の読みを Q 1 で補強しているのである。Q 1 のこの箇所は Wilson にとって校訂上の意義のあることを裏付けている。

74

1.4.53

82

1.5.33

62

F 1 が 'Hebenon' としているところを、Q 2 / Q 1 にある 'Hebona' をそのまま採用、校訂した箇所。Notes, p. 161 に、
'Sh. prob. found the word in Marlowe's *Jew of Malta*, iii. 271 "The juice of hebon and Cocytus' breath," and Marlowe prob. took it from Gower, *Conf. iv.* 3017 "Of hebenus, that slepy tre."...'. MSH, p. 273 には、'...(i) it is highly probable that Shakespeare borrowed the word from Marlowe's *Jew of Malta* (III, 271),

The juice of hebon and Cocytus' breath,

a form which is more likely to have given rise to the Q2 than the F1 variant, and (ii) since Q1 also reads "Hebona", we may assume that this was the form accepted by Scribe P and spoken on the stage'.

とあり, Wilson はここで, Q1 を判断の基準にして, W. W. Greg を始め多くの校訂者が従っている F1 の異形を, 退けていることが分かる。この箇所に関して, Wilson は, Q1 に校訂上のある権威を与えているとあってよい。

159-61

MSH, p. 69 に,

'...the Q2 text seems entirely unexceptionable'. But the thrice repeated "sword" apparently disturbed Scribe P, and F1 accordingly prints the passage thus:

Come hither Gentlemen,
And lay your hands againe vpon my sword,
Neuer to speake of this that you haue heard:
Sweare by my sword.
Gho. Swear.

And that we owe the rearrangement to Scribe P and not to his successor is, I think, proved by Q1, which offers us a report of the F1 version, as follows:

Come hither Gentlemen, and lay your handes
Againe vpon this sword, neuer to speake
Of that which you haue seene, sweare by my sword.
Ghost. Swear.'

と, Wilson は記している。下線を引いたところが示すように, Wilson は Q1 を介在させることによって, Q2 と F1 とのテキストの相違を明確にしようとする。MSH, pp. 68-9 には

'We have assumed in § III that the bulk of the stage-directions, assignment of speeches, and cuts which distinguish F1 from Q2 are the work of Scribe P, and we were encouraged in this assumption not only by the general probabilities of the situation but also by the fact that in almost every case where we can check these matters with Q1, the latter agrees with F1'.

と記されており, 施した下線部が示しているように, Wilson は Q1 が本文校訂上の判断基準を提供する材料として扱っている。

179-80

2.2.73

159.0(SD)

591

3.2.37-43

180

Q2 テキストの signature H2' のマージンに, '*Ham. That's / wormwood*' とあるのを, '(*Hamlet. That's wormwood, wormwood.*)' と校訂した箇所。Notes, p. 202 には,

'Q2 prints this and the interruption at l. 223 in the margin, which suggests that they may have been added after the Gonzago play had been composed'.

と記し, この部分が後で付け加えられたのではないかと, Wilson は考えている。l. 223 のところにも, マージンに, '*Ham. If she should / breake it now.*' とある。MSH, p. 302 では,

'Hamlet's comment upon the talk of second marriages in the Gonzago play is

“That’s wormwood” in Q 2 and “Wormwood, Wormwood” in F 1. The F 1 version is sanctioned by long usage, and seems as much in character as repetitions like “Very like, very like”, “Except my life, except my life, except my life” noted in vol. I, p. 80. Yet Q 2 gives excellent sense; it is the “copy entitled to preference”; and the F 1 repetition may after all be nothing but one of Burbadge’s tricks². I should myself declare unhesitatingly for Q 2, were it not that Q 1 gives us “O wormewood, wormewood!” which is proof that the repetition was current on the stage at the beginning of the seventeenth century and that Scribe C cannot be responsible for its presence in F 1’.

と注記しており、下線を引いた箇所、つまり、Q 1にあるハムレットの台詞である同語の繰り返し部分がなかったなら、F 1の異形を簡単に退けるはずだといっていることから、Q 1の異文が Wilson に Q 2 と F 1 / Q 1 の conflation（異文の合成）の形をとる判断を下させたのである。従って、ここでは、Wilson にとって、Q 1のこの箇所のもつ意義は極めて大きなものがあったといえる。また、付随的ながら、Q 1をエリザベス朝の英語の特徴を伝える資料としても扱っていることから、語法の点からも権威のあるテキストと考えていることが分かる。

Q 2: ‘Ham. That’s / wormwood’.

F 1: ‘Wormwood, Wormwood’.

Q 1: ‘O wormewood, wormewood!’

236

241

Q 2では‘let the gauled Iade winch’, F 1では‘let the gall’d iade winch’となっているところを、Q 1にならい、‘let the galled jade wince’³と校訂した箇所。
‘wince (Q 1) Q 2, F 1 “winch”…“winch” = obs. form of “wince.” In Sh. ’s day “wince” = kick’ (Notes, p. 203).

MSH, p. 288 には、

‘There seems no point...in clinging to “winch” and “swoopstake”. The first is meaningless as a verb to us, having long been replaced by “wince”, though as Dr Greg notes the latter had a different meaning in the seventeenth century. The second, on the other hand, if altered at all should surely be modernised outright as “swoopstake”; there is no special virtue in the Q 1 “swoopstake” which most editors read’.

と述べ、下線を施したところから、逆に Q 1の‘wince’には良い点があることを Wilson は告白しているようである。Q 1の良い点を素直に認めないのは、Wilson が、社会的にも、職業的にも、Q 1のテキスト観についても Pollard につき従っているからであろう。

251

260

3.4.4

9-10 (Additional Notes)

102.0 (SD)

Q 2では F 1と同じく、‘Enter Ghost.’となっているト書きを、Q 1の‘Enter the ghost in his night gowne.’にならい、‘Enter the GHOST in his night-gown’⁴と校訂した箇所。Notes, 213 には

‘I adopt the S.D. from Q 1, which almost certainly informs us of what took place on Sh.’s stage. “Night-gown” = dressing-gown (cf. *Macb.* 2.2.70), appropriate to the Queen’s bedroom as the armour was to the battlements. Cf. l. 135 ‘in his habit as he lived.’

と記されており、施した下線部が示しているように、Wilson は Q 1の S.D. を採用したのである。MSH の、p. xiii に、

‘I had set out to discover what sort of wild ass had perpetrated the ridiculous text of 1603...’.

とあるのを覚えているものにとっては少々信じ難いことである。

4.2.17

4.5.20.0 (SD)

37

142

153.0

4.7.56

161

176

5.1.252.0 (SD)

Q2/F1にはない、Q1の‘*Hamlet leapes in after Leartes*’というト書きを採用している箇所。Notes, p. 239には、

‘Q1 “Hamlet leapes in after Leartes,” Q2, F1 omit. ...It is obvious that Q1 preserves the stage-business...’

と注記し、Q1の示唆の大きいところを指摘している。MSH, p. 186では、

‘in Q1 we get not only at this point *Leartes leapes into the graue* but, a few lines later on, *Hamlet leapes in after Leartes*. That a scuffle takes in the grave itself is the stage tradition, and the evidence of Q1, which presumably reports what the pirate saw at the Globe, is sufficient testimony I think that this was what Shakespeare himself intended. It follows therefore that both stage-directions, or something corresponding to them, stood in Shakespeare’s manuscript, though only one reached the F1 text and neither appear in Q2’.

としている。この下線部分は、Wilsonがそれまでにないト書きを挿入せんがために、Q1をその正当性主張のための拠り所としていることを示している。このト書き部分はシェイクスピアの意図であったと主張しているのであるから、このト書きを書き込ませることになった‘pirate’に感謝の言葉を残していてもよいと感じるのは思い過ごしか。

270

5.2.166-8

300.0 (SD)

342

Q2に‘O god Horatio, what a wounded name’¹とあるのを、‘O God, Horatio,...’²と校訂した箇所。Notes, p. 257には、

‘Q1 “O fie Horatio,” F1 “Oh good Horatio”—which all edd. but Capell, Malone and Furness read. The Q1 reading lends support to Q2’. (Q1では *Horatio* とイタリック)と記し、Q1の‘fie’という異形をQ2の‘god’という読みを裏付けるものとしている。また、MSH, pp. 266-7では、

‘In the first line, however, I have convinced myself, after some hesitation, that we ought to follow the Q2 “god”. As a matter of fact, “god” is a fairly well-established Shakespearian spelling of “good”, which is found again at 4.5.72-4 as well as in other texts, so that F1 presents no real difficulty. Yet, taking the whole context into account, the more agitated Q2 variant is surely preferable, although it is unnecessary to make it a detached exclamation as Capell, Malone and Furness do, and read “O God!—Horatio”, so if it were a dying groan; it is simply an exclamation of strong feeling, and one that may well have been modified in F1 to comply with the Act of 1606¹. Moreover, there is the evidence of Q1 to throw into the balance. While its reading of “leaeue” with Q2 may be, and I think must be, a coincidence, its “O fie” is strong evidence that the reporter remembered an expletive of some kind in Burbadge’s mouth’.

とし、強調した先の下線部に示されているWilsonの判断を、後の下線部分にあるQ1の異形で裏付けようとしていることがはっきり分かる。ここに、Wilson以前の版が採用している‘good’という読みを退け、Q2の読みの正当性が明白で

あることを示すために、Wilson が Q 1 に校訂上の市民権を与えていることが明らかである。

-
- 40 J. D. Wilson が *The New Shakespeare: Hamlet* 編纂のために Q 1 を校合したことがテキスト巻末注より明らかな箇所。その内、3箇所は Q 1 からのものを採用している。
-

2) Harold Jenkins, ed., *The Arden Shakespeare: Hamlet* (1982) の Q 1 校合状況

1982年に出された Harold Jenkins の *Arden Hamlet* に関してはどうか。

Jenkins は Q 1 を次のように評価している。

The usefulness of Q 1 is not that it offers clues to the Ur-Hamlet but that it throws light on the theatrical and textual history of Shakespeare's play. It suggests something of the performances, presumably on tour, for which such a version was provided, and it tells us something of the performances which the actor-reporter had known. Hamlet's instructions to the players are expanded by a piece of actor's gag... The stage-directions indicate not what the author envisaged but what an actor remembered actually taking place. They reveal that the Ghost appeared in the Queen's chamber 'in his night gown' (III. iv. 103) and that the mad Ophelia came in 'playing on a lute, and her hair down singing' (IV. v. 20). It is Q 1 that tells us not only, like F, that Laertes 'leaps into the grave', but that 'Hamlet leaps in after' him (V. i. 251), and that in the crisis of their fencing-match 'they catch one another's rapiers' (V. ii. 306). And Q 1, in spite of all its corruptions, can provide some check on the two better texts, helping now to authenticate their readings, now to identify or explain their errors ('Introduction', p. 36).

下線部が示すように、誤りは多いが、Q 1 中のト書きは当時の役者が実際にあった上演の状況を伝えているものとして評価できるとしているのである。また、Q 1 は、これまで権威を与えられ典拠となってきた二つの古版、Q 2 と F 1 とが異なっている箇所で、両者の誤りなどを見つけ、説明するさいに有用であると評価している。もっとも、ある種の疑念を有しながら Q 1 テキストを読んだことも一方でほめかしているのであるが。

Jenkins の版になると、Q 1 校合の数は、Wilson とは比較にならないほど増加していることが表 2 から分かる。Q 1 校合の箇所は合計498、それとは逆に採用数は小さくなっている。Q 1 の異形採用は3箇所、内、Q 2 のつもりだったが、誤って、Q 1 の異形を採用した箇所が1箇所、本文に関わる箇所が1箇所、ト書きにかかわるものが1箇所となっている。Q 1 からの採用数は少ないものの、Jenkins の Q 1 の異形評価は全体としては、Wilson のそれよりも高いと判断できるが、それは、1980年手前からはじまった Q 1 再評価と無縁ではないように思える。

表 2
Jenkins が Q 1 *Hamlet* を校合した箇所

幕 / 場 / (Jenkins の版のもの) (Q 1 の校合を示す箇所)	行 / 箇所 (() 中の数字は校合した箇所の数。例えば、35 (2) は35行目の中に校合箇所が2箇所あることを示している)
Dramatis Personae	(Hamlet, Claudius, Gertred (Gertrard / Gertrad in Q 2; Gertrude), Corambis (Polonius), Leartes (Laertes), Ofelia (Ophelia), Voltemar (Voltemand), Cornelia (Cornelius), Rossencraft (Rosencraus in Q 2; Rosincrance / Rosincrane in F 1), Gilderstone (Gyldensterne / Gyldersterne in Q 2; Guildensterne in F 1), Mervellus, Barnardo / Bernardo, 'a Bragart Gentleman' (Osric), A Priest (Doct. in Q 2), Clowne (Grave-digger), an other. (小計1)
1.1.	0(SD); 14; 12-4; 14; 18; 19; 24; 36; 42; 44; 46; 47; 48; 52; 54; 64(2); 66; 68; 71; 76(2); 90; 91; 92; 101; 112-28; 130(SD); 134-5; 137-8; 141; 142(SD); 155; 163; 165; 166; 168; 169; 179; 180. (小計40箇所)
1.2.	0(SD); 35; 38; 40; 41; 50; 58; 58-60; 64; 128; 129; 143; 147; 150; 151; 155; 159; 175; 177; 178; 183; 185; 186; 187(2); 190; 195; 198; 200(2); 204; 205; 209; 210; 213; 224; 225; 228; 230; 235-6; 238; 240; 241; 242-3; 242; 243(2); 248; 249; 251; 254; 254(SD); 257. (小計53箇所)
1.3.	57(2); 62; 65(2); 74; 109; 115; 117. (小計9箇所)
1.4.	1; 2; 6(SD); 9; 17-38; 42; 45; 46; 48; 49; 56; 61; 63; 69; 71; 72; 75-8; 82; 87. (小計9箇所)
1.5.	1; 18; 19; 20; 22; 24; 29 (Jenkins は 'Haste] Q 2, Q 1; Hast, hast F.' としているが、Q 2 では 'Hast' になっており、ここは、誤って、Q 1 にしかない異形を用いる結果となった) (3); 33; 35(2); 41; 43; 55; 56; 58; 59; 60; 62; 63; 69; 71; 75; 80-1; 84; 91; 91(SD); 104; 107; 109(SD); 112(SD); 113; 115; 117; 118(2); 119; 123; 128; 129(SD); 132; 135; 136; 137; 138; 139; 140; 142; 146; 158; 164; 167-8; 169; 170; 175; 178; 181; 182; 184; 185; 187-8. (小計61箇所、内誤って、Q 1 の異形を採用した数1)
2.1.	0(SD); 1; 14; 54; 56; 97; 99; 114. (小計8箇所)
2.2.	39(SD); 43; 45; 48; 73; 78; 83; 85; 106; 141; 174; 179; 195(2); 203(2); 208(2); 213(2); 221(SD); 239-69; 279; 309; 312(2); 319; 322-3; 323; 324; 360; 364(SD); 379; 383; 384; 402-4; 415(2); 416; 416(SD); 419(3); 421; 426; 429; 437; 440-1; 442(3); 443; 447; 448; 452; 453; 461; 495; 498; 498-9; 500; 502; 510; 520; 522; 524; 525; 531; 534; 535; 539(SD); 553; 572; 575; 577; 578(2); 578(2); 579; 583; 584(2) (小計83箇所)
3.1.	83; 107-8; 110; 121; 129(2); 134; 144; 145(3); 146; 147-8; 149; 163. (小計15箇所)
3.2.	3; 4; 9; 10; 13; 32; 45; 91(SD); 97; 99; 101; 108; 127; 128; 131; 133(SD); 135(4); 136(SD); 137; 138; 139; 140; 147; 149(SD); 150; 168; 181; 220 (<i>P. King</i> ; <i>Duke Q 1</i>); 156; 172; 211; 222 (<i>P. Queen</i> ; <i>Dutchesse Q 1</i>); 176; 181; 218; 219; 225; 232; 234; 237; 240; 246(2); 247; 248; 250; 252(2); 254; 254(SD); 255(2); 260; 268; 360(2); 362; 367(2); 369; 370; 371(2); 372; 374(2); 390(SD).

	(小計69箇所)
3.3.	72; 75; 79; 80; 91. (小計5箇所)
3.4.	4; 5; 21; 22; 32; 77; 103(SD); 117; 142; 217; 219(SD). (小計11箇所)
4.1.	0(SD); 7; 10; 11. (小計4箇所)
4.2.	16-7. (小計1箇所)
4.3.	19; 20; 24; 26-8; 39(2); 55; 60(SD). (合計8箇所, 内Q1の異形採用数1)
4.4.	0(SD); 3; 8(SD); 9-66. (小計4箇所)
4.5.	20(SD); 23-6, 29-32 (Ophelia's song); 38; 39(2); 42; 48-51; 52-5; 52; 62-3; 64; 65; 111(SD); 142; 153(SD); 160; 173-4; 174; 180(3); 185; 187 (Ophelia's song); 192; 193; 196; 197(3). (小計30箇所)
4.6.	(Scene); 55; 56; 161; 176; 180; 182(2). (小計8箇所)
4.7.	55; 56; 161; 176; 180; 182(2). (小計7箇所)
5.1.	28-9; 59(2); 73(SD); 84(2); 97; 135; 137(2); 147; 159(2); 160; 161; 175; 178; 180; 187; 196; 201; 206; 210; 211(SD); 211; 219; 236; 243(SD); 246; 254; 255; 256(2); 269; 270; 271; 272; 279; 287; 287(SD); 288. (小計41箇所)
5.2.	80(SD); 144; 156; 176; 215; 216; 239; 240; 258; 278(SD); 286; 287-8; 289; 291; 295(SD); 306(SD); 308(SD); 316(SD); 321; 322; 331; 332(SD); 336 (SD); 346; 349; 350; 366(SD); 394; 395; 403; 406. (小計31箇所)

Q1校合の箇所合計498

内Q1の異形採用 = 3 (内, Q2のつもりだったが, 誤って, Q1の異形を採用した数1 / 本文に関わるもの1 / SDにかかわるもの1)

3) *The Oxford Shakespeare: The Complete Works* (1988) のQ1校合状況

The Oxford Shakespeare: Hamlet の場合はどうであろうか。この版の典拠は Wilson や Jenkins の版とは異なる。Stanley Wells, Gary Taylor 達は, Q2を自版の典拠とする他の編者達とは異なるテキスト観を提示した。上演を目的として創作されたテキスト, しかも, 絶えず変更, 削除, 追加が行われたことが分かるテキスト, 更に, 同じテキストを用いても, 上演の度に表情が変わるテキスト, このような性質を帯びている芝居のテキストのどの時点を捉えて, 沙翁のテキストと呼ぶかは極めて難しい問題であるが, Oxford Shakespeare の編者達はその問題を最初の上演に至る段階までの変化を踏まえてテキストを捉え, その段階で成立したテキストを作者のテキストというように考えたのである。

そのようなテキスト観を提示した *Oxford Shakespeare* のQ1評価は, 次の引用,

The reported texts have many faults. Frequently they garble the verse and prose of the

original — “To be or not to be; ay, there’s the point”, says the 1603 *Hamlet*; usually they abbreviate — the 1603 *Hamlet* has about 2,200 lines, compared to the 3,800 of the good quarto; sometimes they include lines from plays by other authors (especially Marlowe); sometimes they include passages clearly cobbled together to supply gaps in the reporter’s memory.

If we accept the argument that Q 1 derives from a memorial reconstruction, then Q 1 itself stands outside the normal processes of textual transmission, and can only be related to F through the medium of theatrical performance. If Q 1 reflects performances in or before 1603, then F can only be related to Q 1 through the medium of theatrical performance (*The Oxford Shakespeare*, pp. xxxii-iii).

が示すように、Q 1 が沙翁の書いた草稿や上演用台本など、作者が明確に関わっているテキストと直接的関係を有していないと明言しているところに現れている。Q 1 が作者沙翁の草稿ないしは上演用台本と関わるのは、上演という、テキストから一段階隔てた次元とだけだというのである。Oxford Shakespeare の編者は Q 1 が記憶によって再構成されたテキストであり、従って、テキストの編纂にあたって、信頼の置けない箇所が随所にあると評価したのであった。

しかし、本版が Q1 *Hamlet* をその成立過程の特徴を踏まえて評価している点として、

For all this, they are not without value in helping us to judge how Shakespeare’s plays were originally performed. Their stage directions may give us more information about how the plays were staged than is available in other texts: for instance, the reported text of *Hamlet* has the direction “*Enter Ofelia playing on a lute, and her hair down, singing*” — far more vivid than the good Quarto’s “*Enter Ophelia*”, or even the Folio’s “*Enter Ophelia distracted*”. Because these are post-performance texts, they may preserve, in the midst of corruption, authentically Shakespearian changes made to the play after it was first written and not recorded elsewhere (p. xxxiii).

という記述が指摘するように、Q 1 のト書きの有効性を看過することはできない。本版の編者は、Q 1 中にあるト書きには、*Hamlet* がどのように演じられたかを伝える、他の古版には含まれていない情報が、誤りを含んでいる中にも、見い出せるかも知れないと考えているのである。この意味で、表 3 が示すように、Q 1 の校合箇所合計200、そのうち、Q 1 の異形採用は 6 箇所。その 6 箇所のうち、5 箇所はト書きに関わっているという点は、この版の編者の Q 1 評価を裏付けているように思える。

本版の Q 1 評価は、記憶によって再構成されたテキストである Q 1 *Hamlet* には、それゆえに多くの誤りが含まれており、信頼に欠けるところがある。しかし、記憶による再構成テキスト、上演を観て作られたテキストであることから、実際の上演に用いられたト書きが書き込まれている可能性があり、この点が本版編纂に貢献するものと考えたといえる。

表 3

The Complete Works: Hamlet (Oxford) が Q 1 *Hamlet* を校合した箇所

幕/場/ (Oxford 版のもの)	行	<i>The Complete Works: Hamlet</i> (Oxford, 1986) の Q 1 校合状況 (Companion とは Stanley Wells and G. Taylor et al, eds., <i>William Shakespeare: A Textual Companion</i> (1987) のことである。太字は Q 1 採用箇所。校合を一覧にしている箇所は Companion, pp. 402-11 の 'Textual Notes')
1.1.		Title; 24-5; 60; 62(2); 86; 131 (F は 'day'; ここでは Q 2 の 'morne' を採用); 139; 144 (F は 'talkes'; ここでは Q 2 / Q 1 の 'takes' を採用); 155. (小計10箇所)
1.2.		34; 35; 128(SD); 150; 176; 185; 186; 195; 204; 205; 209 (F: 'Whereas they had deliuer'd both in time, / Forme of the thing; each word made true and good,'; Q 2: 'Whereas they had deliuered both in time / Forme of the thing, each word made true and good,'; Q 1: 'Where as they had deliuered forme of the thing. / Each part made true and good,'; ここでは Q 1 の異形を採用して, 'Where, as they had delivered, both in time, / Form of the thing, each word made true and good,' としている); 237; 242; 248. (小計14箇所, 内 Q 1 の異形採用数 1)
1.3.		1; 74(2); 117. (小計 4 箇所)
1.4.		7(SD); 10; 23; 26; 34; 37; 53; 59; (小計 8 箇所)
1.5.		1; 19; 22; 24; 29; 33; 35; 43(2); 45; 55; 69; 71; 75; 84; 107-8; 114; 120; 137; 140; 158; 164; 171; 175; 178; 179. (小計26箇所)
2.1.		1; 98; 115. (小計 3 箇所)
2.2.		0(SD); 43; 45; 48; 180; 197; 202; 214; 280; 314; 325; 392; 421; 425; 435; 438; 440; 446-7; 458; 459; 467; 476; 501; 504-5; 506; 511; 521; 528; 531; 536; 540; 544 (PLAYERS); 577; 580; 585. (小計35箇所)
3.1.		99; 112; 135; 140; 145; 146(3); 158. (小計 9 箇所)
3.2.		5; 9; 10(2); 13; 32; 94; 131; 134; 136; 145; 231; 233; 239(2); 246; 249; 259; 278(SD); 281; 357(2); 364; 365; 366; 388. (小計26箇所)
3.3.		72(SD); 80. (小計 2 箇所)
3.4.		4; 7(SD); 93(SD); 108. (小計 4 箇所)
4.1.		0(SD); 6. (小計 2 箇所)
4.2.		16-7. (小計 1 箇所)
4.3.		21; 24-5; 26-8; 38. (小計 4 箇所)
4.5.		20 (SD: F 'Enter Ophelia distracted.'; Q 2 'Enter Ophelia.'; Q 1 'Enter Ofelia playing on a Lute, and her haire / downe singing.'; Oxford 版は, 部分的に Q 1 を採用し, 'Enter Ophelia mad, 「her hair down, with a lute」' としてい

	る。); 41; 51; 141; 154(SD); 176; 188-9; 197; 198(SD). (小計9箇所, 内Q1の異形採用数1)
4.7.	56; 134; 140; 153; 156. (小計5箇所)
5.1.	55(SD); 60; 74(SD); 84; 96; 135; 137(2); 160; 162; 182; 208; 212(SD); 247(SD); 250; 255(SD); 259; 272; 273. (小計19箇所)
5.2.	112; 143; 158; 190; 236; 237 (SD: F1 および Q2 にはなく, Q1 にある ' <i>They play againe.</i> ' を採用し, ' <i>They play again</i> ' としている); 244 (SD: F1 および Q2 にはなく, Q1 にある ' <i>She drinks.</i> ' を採用し, ' <i>She drinks, then offers the cup to Hamlet</i> ' としている。); 255(SD); 256 (SD: F1 および Q2 にはなく, Q1 にある ' <i>the Queene falles downe and dies.</i> ' を採用し, ' <i>The Queen falls down</i> ' としている); 263 (SD; ここでは, Q1 の ' <i>the Queene falles downe and dies.</i> ' の残りを適用し, ' <i>She dies</i> ' としている); 264; 264(SD); 283(SD); 296; 297; 314(SD)(2); 343; 344. (小計19箇所, 内Q1の異形採用数4)
<hr/>	
	Q1 校合の箇所合計200 内Q1の異形採用6 (内, ト書きが5)
<hr/>	

4) Evans, G. Blakemore, and J. J. Tobin, eds., *The Riverside Shakespeare*, 2nd. edn. (1997) の Q1 校合状況

The Riverside Shakespeare (2nd edn., 1997) の Q1 *Hamlet* 評価は, 本第2版の *Hamlet* の本文の後に付された 'Note on the Text', p. 1234 に明示されている。以下の引用,

Q1, approximately half the length Q2, is one of the so-called "bad" quartos, i. e., a memorially reconstructed version, in this case, one based most probably on a much shortened text prepared by Shakespeare's company for provincial touring, the principal reporter, it is generally agreed, being the actor who doubled in the roles of Marcellus, Lucianus (the villain the play-within-the-play who represents Hamlet's uncle, Claudius), and perhaps, Voltmand. Thus, although in one sense a substantive text, Q1 is without any real textual authority, but its stage directions and very occasionally its readings are valuable in supplementing, corroborating, or correcting Q2 and F1. It also contains one scene...not found in Q2-4 or F1.

の下線をほどこした部分が示すように, テクストの成立背景との関わりで, Q1 が *Hamlet* 編纂において, その典拠とはなりえないが, 本文校訂に役立つことを認め, ト書き, そして, ほんの限られた数ではあるが, 本文中の異形は, 二つの古版, Q2 と F1 を補い, 確実なものにし, 訂正する意味で, 有用であると明言している。

表4が示す如く, Q1 校合の箇所は4版中で一番多い, 695に上る。そして, Q1 の異形採用も一番多く, 10箇所, そのうち, 3箇所はト書き, 7ヵ所が本文に関わるものになっている。これらの数字は *Riverside Shakespeare* の初版(1974)にある 'Textual Notes' のそれと何ら変わりはなく, この版の再版の真の意味がどこにあるのか疑わせる要素になっているように思える。

Q1 *Hamlet* の異形が有用であるということは先の引用から明白だが、この異形採用の点から見ても、*Riverside Shakespeare Hamlet* にとって、Q1 *Hamlet* は校訂上決して無視できない位置付けのテキストであることは明確といえる。

表4

The Riverside Shakespeare (2nd edn., 1997) が Q1 *Hamlet* を校合した箇所

幕 / 場 / (Riverside のもの)	行 (太字は Q1 の異形を採用している箇所。)
1.1.	Act-scene division (小計1箇所) 0(SD); 14; 16; 17; 21; 33; 40; 43; 44; 45; 55; 61(2); 63(3); 65; 68; 73(2); 79; 87; 89; 98; 108; 108-25; 126(2); 139; 142(SD); 150; 151; 158; 160; 161; 163; 164; 167; 168; 175. (小計29箇所)
1.2.	0(SD)(3); 29; 34(3); 35; 38; 50; 55; 58(2); 58-60; 126; 127; 128(3); 129; 150; 151; 155; 156(2); 157; 158; 159; 174; 175; 177; 177; 183; 185; 186; 187; 191; 195; 198; 200(2); 203; 204; 209; 213; 224; 225; 227; 228 (speech prefixes: Mar., Bar.); 231; 236; 237; 238 (speech prefix); 239; 241; 241; 242; 247; 248; 250; 250; 251; 253(2); 256. (小計60箇所)
1.3.	0(SD); 1; 9; 37 ; 49; 51(2); 57; 57; 62; 63; 65; 65; 74; 74; 109; 114; 115; 117. (合計18箇所, 内 Q1 の異形採用数 1)
1.4.	1; 2; 3; 6; 9; 17-38; 48; 49; 56; 61; 63; 71; 72; 75-8; 82; 87. (小計16箇所)
1.5.	1 ; 18; 20; 22; 24; 29; 33; 35; 38; 41; 43; 45; 55(2); 56; 58; 59; 60; 62(2); 63; 64; 69; 71; 75; 79; 84; 91; 93; 104; 107; 109; 113(2); 115; 116; 119; 121; 122 (2); 123; 126; 129; 130; 131; 132; 133; 134; 136; 137; 140; 150; 151(2); 156(2); 159; 161; 162(2); 167; 170; 173; 174; 176; 177; 180; 183; 187. (小計69箇所, 内 Q1 の異形採用数 1)
2.1.	0(SD); 1(2); 4; 14; 28; 50; 53; 54; 58; 71(2); 94; 96(2); 98; 111; 117. (小計17箇所)
2.2.	0(SD)(3); 17; 29; 39; 43; 45; 48; 58; 63; 73; 76; 78; 85; 106; 113; 151; 153; 161; 174(2); 178-9; 179; 188; 195(2); 196; 200; 202; 203; 208; 213; 215; 216; 219; 221 ; 270; 275; 279; 301; 309(2); 313(2); 317; 320; 323-4; 324; 325; 327; 329 ; 363; 364; 365(2); 366; 368(SD); 383; 387; 388; 391; 397-8; 398-9; 400; 403; 407-8; 416-8; 419; 420; 421; 422; 423(2); 425(2); 429; 430(2); 433; 468, 502, 505 (speech prefixes); 433; 438; 441; 444-5; 445; 446; 447(2); 450(2); 451; 456(2); 457; 465; 469; 499; 502(2); 503; 504; 506; 509; 514; 519; 520; 522; 524; 526; 529; 530; 534; 539, 544 (speech prefixes); 541(2); 546-8; 549; 549(SD); 559; 561; 576; 579; 580; 583; 587; 588(3); 597; 599. (小計129箇所, 内 Q1 の異形採用数 2)
3.1.	0(SD); 1; 19; 43; 48; 55-89; 59(3); 74; 82; 106-7; 108-9; 109; 120; 127-8; 128; 131-2; 132; 137; 141; 142; 143(2); 144; 146; 147; 161; 162; 167. (小計29箇所)
3.2.	0(SD); 3; 4; 9(2); 10(2); 12; 14; 15; 32; 35; 45; 45(SD)(2); 51; 78; 89(SD); 94; 100; 102; 103-6; 109; 114-5; 116; 133-4; 135(SD); 137(4); 140; 141-2; 141; 142; 143; 144; 152; 154(SD); 155; 155-73; 161 (speech prefixes) 171-2; 181; 212; 218-9; 223; 228; 230; 237; 237-8; 239(2); 241; 245; 246-7; 252(2); 253; 256; 258(2); 260; 261(2); 266; 270; 271(2); 274; 323; 330; 343; 345; 359;

- 369(2); 371; **371**; 372(SD); 376; 377; 378; 383-5; 383; 386; 386(SD); 396; 399.
(小計89箇所, 内 Q1 の異形採用数 1)
- 3.3. 17; 36-72; **72**(SD); 75; 79; 80; 89; 90; 91.
(小計 9 箇所, 内 Q1 の異形採用数 1)
- 3.4. 4; 5; 22; 23; 32; 71-6; 77; 78-81; 92; **101**; 137; 161-5; 165; 167-70; 180;
202-10; 215; 217(SD).
(小計19箇所, 内 Q1 の異形採用数 1)
- 4.1. 0(SD); 4; 10; 11; 37(SD); 40; 41-4.
(小計 7 箇所)
- 4.2. 18.
(小計 1 箇所)
- 4.3. 11; 19; 20(2); 24; 26-8; 29; 34; 35; 36; 39; 51-3; 52.
(小計14箇所)
- 4.4. 0(SD); 3; 8; 8(SD); 9-66.
(小計 5 箇所)
- 4.5. 0(SD); 20; 23; 26; 29(SD); 33; 38; 39(2); 40; 41; 42; 46; 48-66; 52; 64; 65;
72-3; 73(SD); 76; 96; 97; 109; 116; 128; 138; **143** ('swoopstake', from Q1's
'Swoop-stake-like'); 144; 161; 171-2; 176(2); 182; 183; 188; 190-1; 195; 196;
199; 200(2); 200-1; 201; 202.
(小計45箇所, 内 Q1 の異形部分的採用数 1)
- 4.6. (Scene omission; Q1 contains a unique scene, not found in Q2-4 or F1, where
Horatio and Gertred converse with each other)
(小計 1 箇所)
- 4.7. 8; 35(SD); 41; 56; 59; 68-81; 100-2; 106; 114-23; 140; 150; 162; 166; 177;
181; 183.
(小計16箇所)
- 5.1. 1 (speech prefix); 3 (speech prefix); 12; 43; 55(SD); 59(2); 60; 64; 66; 74
(SD, which partly adopted Q1's stage direction: 'he throwes vp a shouel.');
- 85
(2); 94; 98; 99; 111; 115; 118; 139(2); 141; 148; 150-1; 151; 161-2; 165; 166;
167; 171; 173-4; 179; 181; 184; 186(2); 193; 208; 213; 217(SD); 221; 226, 235
(speech prefixex); 229; 243; 250; 256; **258**(SD); 262; 263; 264; 269; 274; 275;
276; 277; 284 (speech prefix); 292, 293(SDD); 294-9.
(小計62箇所, 内 Q1 の異形採用数 1)
- 5.2. 1; 68-80; 80(SD); 81, 89 (speech prefixes); 91; 98; 100; 106-43; 147; 148;
155-6; 158; 159(2); 165-9; 165; 179; 183(SD); 194(SD); 217; 219; 220; 224
(SD); 230; 244; 261(2); 278(SD); 279(SD); 284; **285**(SD); 286; 288; 297; 303
(SD); 306; 310(SD); 315; 316; 319; 326; 327(SD); 331(SD); 344; 345; 358
(SD); 361(SD)(2); 364; 366; 367 (speech prefix); 389; 390; 398; 401; 403(SD).
(小計60箇所, 内 Q1 の異形採用数 1)

Q1 校合の箇所合計695

内 Q1 の異形採用=10 (本文に関わるもの 7 / SD にかかわるもの 3)

III

以上 4 種の 20 世紀を代表するといえる *Hamlet* のテキストの Q1 校合状況を見ながら、校訂、編集という観点から、Q1 *Hamlet* の有効／有用性の度合を検討してきたわけだが、どの版も、Q1 *Hamlet* が特にト書きと Q2 / F1 の不確定性と誤りの発見、及び修正という点からいって、

決して無視できない価値を有していると判断している。中でも、John Dover Wilson の版は、Q1 評価と矛盾する面が見られただけでなく、自版の典拠 Q2 の読みが正当性を有するということを証かすための、時としては、大いなる権威を有する資料 / テキストとして Q1 を扱っていることが特記される。A. W. Pollard などが下していた Q1 *Hamlet* の評価に大きく影響されていたことは明らかであるが、それゆえにこのような矛盾が生まれたものと思われる⁹⁾。また、*Arden Hamlet*, *Oxford Shakespeare Hamlet*, *Riverside Shakespeare Hamlet* も Q1 のト書きに関しては基本的に一致して、同種の評価を下しているといえる。

20世紀に出版されたこれらの版は、いづれも、折衷方式を取り入れ、post-performance text としての Q1 *Hamlet* はあくまでも記憶による再構成の結果生まれたテキストであると考え、また、相応の理由づけも行っている。この見地からする限り、これらの現代版における Q1 *Hamlet* の有効性と意義とはどうしても小さなものにならざるをえない。authentic なものは、Q2 あるいは F1 *Hamlet* でしかありえないのである。

しかし、ここで忘れてならないことは、既に触れたように、20世紀に入ってファクシミリ版や現代の印字で Q1 *Hamlet* がいくつも出版されてきており、とりわけ、Paul Bertram and Bernice W. Kliman, eds., *The Three-Text Hamlet* (1991) や Graham Holderness and Bryan Loughrey, eds., *The Tragicall Historie of Hamlet Prince of Denmarke* (1992) などは、Steven Urkowitz などの Q1 への問い直しを受けた、近年の本文批評の versioning という動向を反映したものであった¹⁰⁾。

Q1 *Hamlet* のテキスト全体を忠実に世に出そうとする動きと連動して出版された、また、これから出版されるかも知れない版 (Q1 版) に関しては、古版としての Q1 *Hamlet* がそれらの版の土台そのものであるがゆえに、絶大な意味を有するといえる。つまり、上に見たような20世紀を代表する *Hamlet* 版とはいえなくとも、広く読まれることをめざし、ペーパー・バック版で出版されている、Holderness / Loughrey の編纂によるテキストでは、Q1 の意義は極めて大きくなるのである。

これは、現在の沙翁 *Hamlet* のテキスト観の相違に根差す編纂上の大きな乖離といえる。Q1 の成立背景が確定しない限り、今後もこれまでと同じく、本文編纂に関しては、一致した見方を許さない状況が展開していくことは確実で、Q1 *Hamlet* の有用性は明白であっても、その位置付けに関しては上に触れたように、大きく異なる見解が引き続き見られることになると思われる。

注

- 1) 以下を参照。1) Furness, p. 13: 'Of this edition of 1603 only two copies have survived, and both are imperfect; one lacks the title-page, and the other the last leaf. The Quarto of 1604 was the earliest copy known down to 1823, when a copy of the Quarto of 1603 was found Sir Henry Bunbury... In 1856 the second copy, lacking the title-page, was bought from a student of Trinity College, Dublin, a Dublin book-dealer...and now in the British Museum'. / 2) *Shakespeare's Hamlet, the First Quarto, 1603*, reproduced in facsimile from the copy in the Henry E. Huntington Library, p. 3 に、'Two copies of the first quarto edition of Shakespeare's Hamlet, 1603, are known to be extant: one is in the British Museum and the other is in the Huntington Library. The copy in the British Museum has no title-page, and the copy in the Huntington Library lacks the leaf con-

taining the last page of the text' とある。

- 2) Hubbard, pp. 6-7; Holderness and Loughrey, pp. 32-3 を参照。1825年の Payne と Foss の版は最初の Q 1 *Hamlet* の複製版。1860年の S. Timmins の版は反対側のページに Q 2 *Hamlet* を載せたパラレル版。1890年の The Bankside Shakespeare の Q 1 *Hamlet* 版は F 1 *Hamlet* を伴う版。
- 3) Clayton, p. 123 を参照。
- 4) Clayton, pp. 123-4 において、Loughrey の 'Did you feel when you were working with this text that you had to apologize for it by revising in any way, if only to make the sense clear?' という問いに対する、Sam Walters の応えは、'...we did it in a rather purist way. We said this is the play we're doing, and this is the play that's going to be presented, so we didn't as it were "correct" the text. We did the Q 1 version of Hamlet, and didn't apologize for it at all...' というものである。
- 5) Maguire, pp. 3 and 10 を参照。
- 6) Furness, pp. 24-6, Maguire, p. 25 を参照。
- 7) Urkowitz, 'Good News about "Bad" Quartos' (1988), pp. 204-5; Holderness and Loughrey, pp. 22-4; Maguire, pp. 55-7 を参照。
- 8) この他に、Philip Edwards, ed., *The New Cambridge Shakespeare: Hamlet, Prince of Denmark* (1985) や G. R. Hibbard, ed., *The World's Classics: Hamlet* (1987) が20世紀に出された *Hamlet* テキストとして話題を呼んだ。後者は、その Textual Introduction', pp. 67-89 において、Q 1 への立ち入った考察をしている。Q 1 に対する全体的な評価は、

Q 1 is, as it stands, a sorry thing, and, from the editor's point of view, *an extremely unreliable one*, since it owes its existence to a faulty memory and much of its waywardness to sheer incomprehension. ...Its main value, however, lies in this: that through the fog, growing thicker as the play goes on and recollection becomes fainter, one catches glimpses of an acting version of the tragedy current in the early seventeenth century (p. 89).

という箇所の斜字体を施した部分に要約されている。従って、相違はあるが、*Hamlet* テキスト編纂上の位置付けと意義は、Wells et al., eds., *The Complete Works* の示すものとそう大きな相違はないと判断する (Wells et al., eds., *A Textual Companion*, pp. 398-401 を参照)。

Edwards の方も、The first quarto of 1603, an abbreviated and adapted version in language which severely corrupts the original, inherits the cuts and changes made in the early playhouse transcript...' (p. 30) という評価を与え、実際のテキスト編纂においては、"Readings from the 'bad' Q 1 are given when their agreement (or disagreement) with Q 2 or F is of importance" ('Note on the Text', p. 72) の示すところを行っているので、Q 1 の評価と扱いに関しては、他の代表的なそれと大差ないと言ってよい。

- 9) Maguire, pp. 28-31 を参照。
- 10) 以下を参照。1) Urkowitz, 'Good News about "Bad" Quartos', p. 204: 'we all would learn more about Shakespeare's plays if we could look at the actual raw material, the variant quarto and Folio versions'. / 2) Holderness and Loughrey, p. 23: 'his [i.e. Urkowitz's] key emphasis is surely correct: the various surviving printed printed texts of early modern drama should be accepted as the "fundamental documents", and should be "studied for what they are, in and of themselves, rather than solely as pernicious desecrations of Shakespeare's iconic originals".'

参 考 文 献

- Bentley, Gerald Eades, *The Professions of Dramatist and Player in Shakespeare's Time, 1590-1642* (Princeton, New Jersey: Princeton U. P., 1986; first publ. in 1971).
- Boas, Frederick S., *Shakespeare and the Universities and Other Studies in Elizabethan Drama* (Oxford: Basil Blackwell, 1923).

- Clayton, Thomas, ed., *The Hamlet First Published (Q 1, 1603): Origins, Form, Intertextualities* (Newark: University of Delaware Press, 1992).
- Craig, Hardin, *A New Look at Shakespeare's Quartos* (Stanford, California: Stanford U. P., 1961).
- Furness, Horace Howard, ed., *A New Variorum Edition of Shakespeare: Hamlet*, 2 vols. (New York: Dover, 1963; first publ. by J. B. Lippincott in 1877), II, pp. 5-36: 'Appendix: The Date, and the Text'.
- Holderness, Graham, and Bryan Loughrey, 'Introduction', in *The Tragicall Historie of Hamlet Prince of Denmarke* eds. Holderness and Loughrey (Hemel Hempstead, Hertfordshire: Harvester Wheatsheaf, 1992), 13-29.
- Holmes, Martin, *The Guns of Elsinore: A New Approach to 'Hamlet'* (London: Chatto and Windus, 1964).
- Honigmann, E. A. J., *Shakespeare's Impact on His Contemporaries* (London: Macmillan, 1982).
- Hubbard, Frank G., 'Introduction', in *The First Quarto Edition of Shakespeare's Hamlet*, University of Wisconsin Studies in Language and Literature, No. 8, ed. Frank Hubbard (Madison: University of Wisconsin Press, 1920), 4-36.
- Irace, Kathleen O., *Reforming the "Bad" Quartos: Performing and Provenance of Six Shakespearean First Editions* (Newark: University of Delaware Press, 1994).
- Jack, Adolphus Alfred, *Young Hamlet: A Conjectural Resolution of Some of the Difficulties in the Plotting of Shakespeare's Play* (Aberdeen: The University Press, 1950).
- Kehler, Dorothea, 'The First Quarto of *Hamlet*: Reforming Widow Gertred', *Shakespeare Quarterly* 46 (1995), 398-413.
- Loughrey, Bryan, 'Q 1 in Recent Performance: An Interview', in *The Hamlet First Published*, ed. Thomas Clayton (1992), 123-36.
- Lull, Janis, 'Forgetting Hmalet: The First Quarto and the Folio', *Hamlet First Published (Q 1, 1603): Origins, Form, Intertextualities*, ed. Thomas Clayton (Newark: University of Delaware Press, 1992), 137-50.
- Maguire, Laurie E., *Shakespearean suspect texts: The 'bad' quartos and their contexts* (Cambridge: Cambridge U. P., 1996).
- Urkowitz, Steven, 'Good News about "Bad" Quartos', in *"Bad" Shakespeare: Revaluations of the Shakespeare Canon*, ed. Maurice Charney (London and Toronto: Associated University Presses, 1988), 189-206.
- , 'Five Women Eleven Ways: Changing Images of Shakespearean Characters in the Earliest Texts', in *Images of Shakespeare: Proceedings of the Third Congress of the International Shakespeare Association, 1986*, eds. Werner Habicht, D. J. Palmer, and Roger Pringle (Newark: University of Delaware Press, 1988), 292-304.
- , "'Well-sayd olde Mole": Burying Three *Hamlets* in Modern Editions', in *Shakespeare Study Today: The Horace Howard Furness Memorial Lectures*, ed. Geogianna Ziegler (New York: AMS Press, 1986), 37-70.
- Wells, Stanley, and Gary Taylor with John Jowett and William Montgomery, eds., *William Shakespeare: A Textual Companion* (Oxford: Clarendon Press, 1987).
- Wilson, F. P., *Shakespeare and the New Bibliography*, rev. and ed. Helen Gardner (Oxford: Clarendon Press, 1970).
- Wilson, J. Dover, *The Manuscripts of Shakespeare's Hamlet and the Problems of Its Transmission: An Essay in Critical Bibliography*, 2 vols. (Cambridge: At the University Press, 1934).

Hamlet のテキスト

- Bertram, Paul, and Bernice W. Kliman, ed., *The Three-Text Hamlet: Parallel Texts of the First and Second Quartos and First Folio* (New York: AMS Press, 1991).
- Edwards, Philip, ed., *The New Cambridge Shakespeare: Hamlet, Prince of Denmark* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985).
- Hamlet: Second Quarto, 1604-5*, Shakespeare Quarto Facsimiles Number 4 (London: The Shakespeare Association; Sidgwick and Jackson: 1940).
- Hibbard, G. R., ed., *The World's Classics: Hamlet* (Oxford and New York: Oxford University Press, 1987).
- Holderness, Graham, and Bryan Loughrey, ed., *The Tragicall Historie of Hamlet Prince of Denmarke* (Hemel Hempstead, Hertfordshire: Harvester Wheatsheaf, 1992).
- Jenkins, Harold, ed., *The Arden Shakespeare: Hamlet* (London: Methuen, 1982).
- Shakespeare's Hamlet, the First Quarto, 1603*, reproduced in facsimile from the copy in the Henry E. Huntington Library (San Marino, California: The Huntington Library, 1960).
- Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, and Tragedies: A Facsimile Edition*, prepared by Helge Kokeritz (Hew Haven: Yale U. P., 1954).
- Wells, Stanley, and Gary Taylor with John Jowett and William Montgomery, eds., *The Oxford Shakespeare: The Complete Works* (Oxford: Clarendon Press, 1988).
- Wilson, John Dover, ed., *The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark* (Cambridge: At the University Press, 1936).

(小論は1997年10月11/12日の両日にわたり、福岡大学大隈キャンパスにおいて開催された第36回日本シェイクスピア学会の第5セミナーにおいて、「20世紀の版本と編纂における Q1 *Hamlet* の有効性」と題して発表した原稿に部分的な加筆修正を施したものである。)